

近畿大学建築学部・賛八会共催
第2回 建築学部 設計コンペティション
2015

「間伐材の茶室」
(応募総数57作品)

表彰式

■最優秀賞(1作品 5万円分の図書券)

「間伐材の秘密基地」

14-0218 松村 望

14-0220 吉田 暁南

14-0267 鄭 将吾

14-0265 丹田 千晴

14-0271 松村 萌香

■優秀賞(5作品 1万円分の図書券)

「透過する球体」

14-0214 野田 翔平

「FOCUS～対話の空間」

13-305 梅谷 龍馬

「木肌の揺らめき」

14-0281 森下 啓太朗

14-0223 松浦 遼

「structure of thinned wood」

大学院1年 小谷 勇太

「隙間の憩い」

13-0294 山本 裕輝

■特別賞(賛八会賞)(2作品 1万円分の図書券)

「簾」

14-0149 向瀬 琢治

「迷走する森」

大学院1年 島袋 竜次

■佳作(11作品)

「粋」

13-266 大倉 有沙子

13-210 水野 英之

13-270 竹田 桂子

13-279 軽部 春希

13-292 石生 啓悟

13-331 田中 秀知

13-278 木村 真也

13-255 村瀬 俊輝

13-343 宗内 龍弥

「常に壁際」

14-226 吉永 隆乃佑

14-227 永野 匠

14-228 張 涛

14-248 永田 大樹

「夢想の境界」

大学院1年 下村 啓太

「ひと空間としての茶室」

14-152 上田 純也

14-224 荒本 晃大

14-216 柴田 直希

「Malti Log」

大学院1年 神田 峻伸

「対話する空間」

14-278 吉田 亜矢

「書院造の茶室」

14-0250 中山 雄登

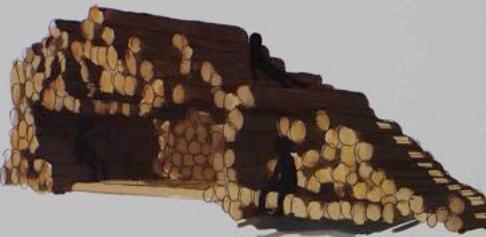
最優秀賞

(1作品 5万円分の図書券)

「間伐材の秘密基地」

- 14-0218 松村 望
14-0220 吉田 暁南
14-0267 鄭 将吾
14-0265 丹田 千晴
14-0271 松村 萌香

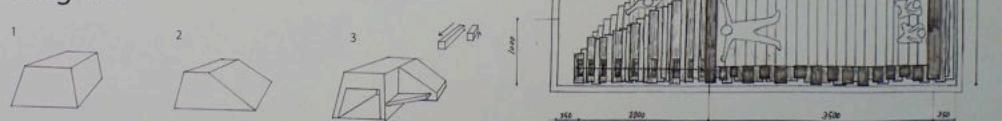
間伐材の秘密基地



Concept

間伐材の持つ良さとは何か。それは太さや長さが不揃いであることだと考えました。今回描画するのは多種多様な人々が行き交う建築学部棟の一階ギャラリースペース。今回は間伐材の茶室なので、加工して形を変えてしまうと間伐材の良さがなくなり利用する意味もなくなってしまうと考えました。なにか別のものを新しく作り出すのではなく、間伐材のもつ多様性をそのまま表現しようと考え、シンプルに積まれた形にしました。

Diagram



平面に木が積まれたボリューム。
斜面をなだらかにすることによって
上に登ることができる。

間伐材の長さの違いで、空間になっていたり
格子になっていたりなど変化が生まれる。

透過する球体

木のフィルターが形象化する精神的空间が
外部と緩衝しあい思考をうながす



concept

ウイルウェイズの人体図は人と自然との融合とい

うダヴィンチの試みの基礎となる象徴的な作品で

ある。

正円は精神的空间を象徴している。

人体図の基礎となる各員を半球体が作り出した美

室。将来的特徴である高さ=180cmとして正円

の大きさを出し、球体にして精神的空间を創る。

球体を木のフィルターで形象化すること

でコンクリート・ガラス・光・人・風景が精神的

空間に溌縝する。

外から閉じられると、外側からの影響がないため発見や発見がなく自分との対話を生じる。外側の刺激により自分の思考は始まる。

のフィルターが形象化した精神的空间はフィルターを通して、中から外へ広がり半透して

思考・対話をうながす。



内輪バース、内部より外がうながす



裏開バース、断面が見える

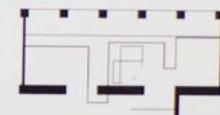


裏上げたバース、球体の下部の輪郭が確かに浮かぶ



正面バース、球体の中心軸が確かに浮かぶ

裏下げたバース、球体の上部が確かに浮かぶ



優秀賞

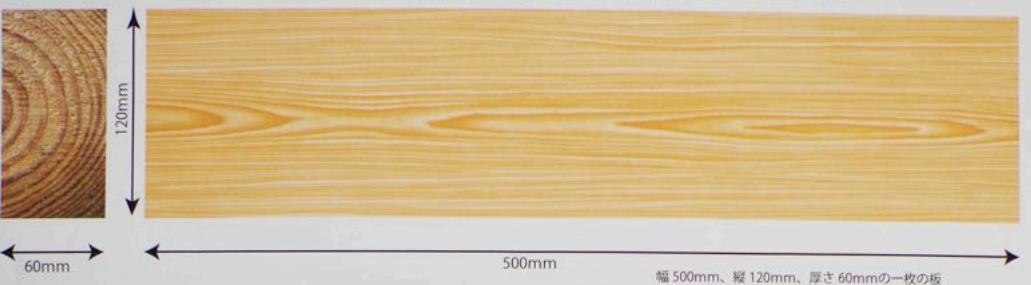
(5作品 1万円分の図書券)

「透過する球体」

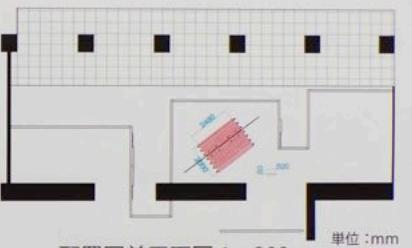
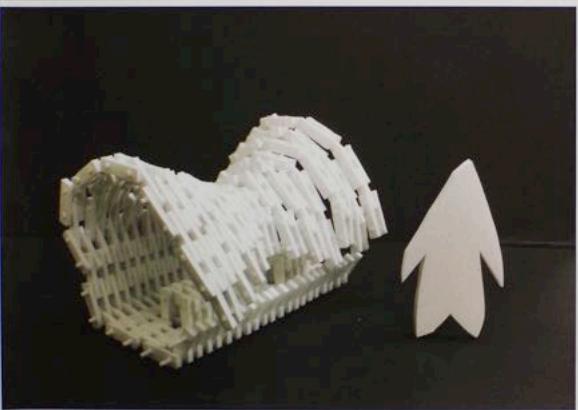
14-0214 野田 翔平

「板」

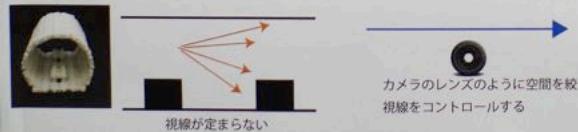
テーマ：大小様々な間伐材をひとつの大きさに統一し、その一種類の部材を連続的に組み合わせ造形する。小さな木材ならではの生産性を考慮し今回のコンペだけでなくこれからも33号館1階ロビーで使われ続けるものを考える。



・FOCUS～対話の空間～



建築により視線をコントロールしあいが向かいあつた時に
対話が生まれる空間。



33号館1階ギャラリーだけでなく、どのような場所でも使えるような形
を模索し、表現してみる。

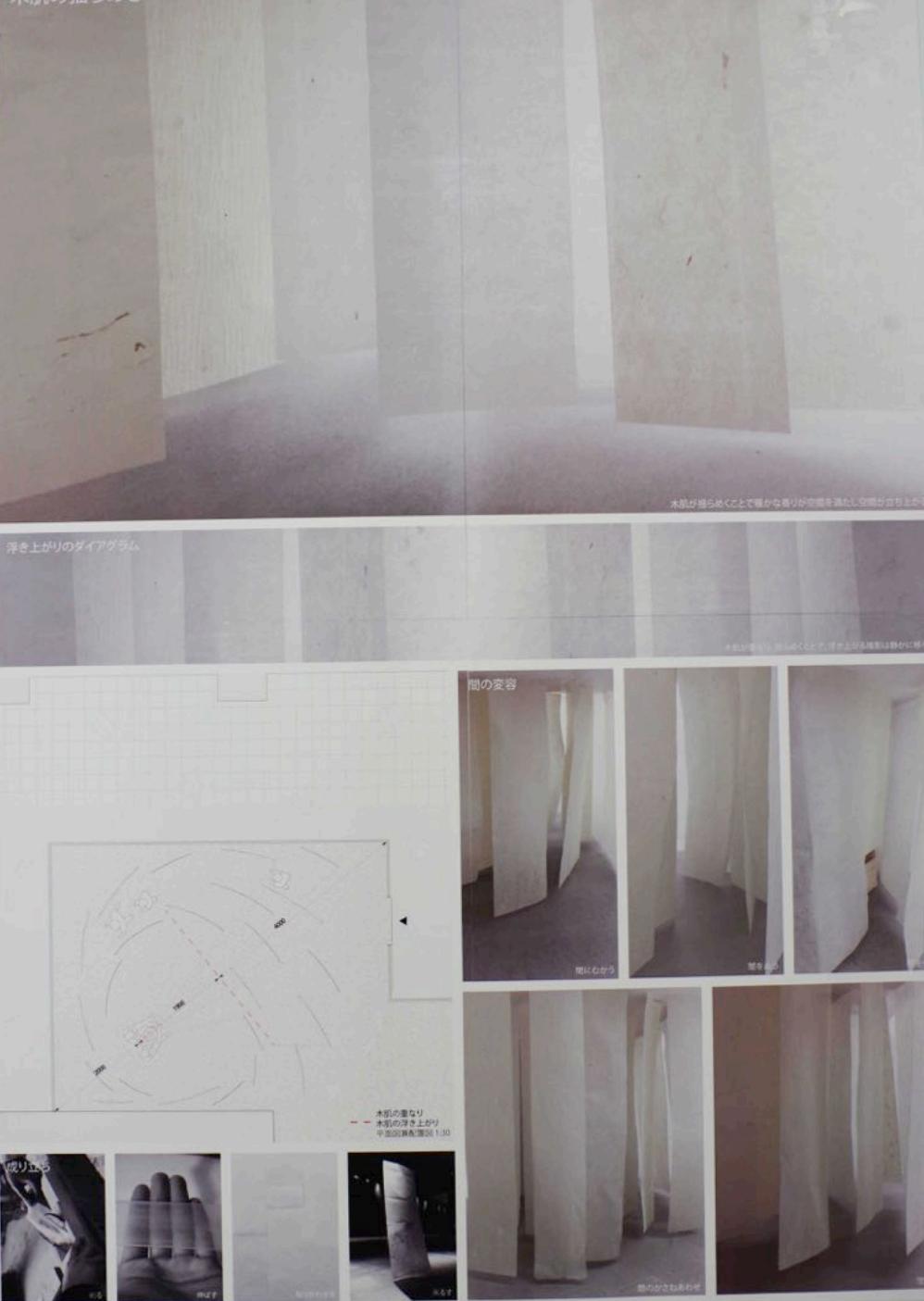


優秀賞

(5作品 1万円分の図書券)

「FOCUS～対話の空間」

13-305 梅谷 龍馬



優秀賞

(5作品 1万円分の図書券)

「木肌の揺らめき」

14-0281 森下 啓太朗
14-0223 松浦 遼

優秀賞

(5作品 1万円分の図書券)

「structure of thinned wood」

大学院1年 小谷 勇太



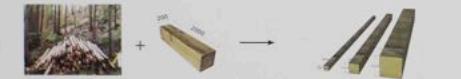
間伐材とは

伐林された木や枝は、年々の成長に伴い木々の間隔が狭くなってしまいます。そのままにしておくと、陽光が入らなくなり、ひだりな木になってしまい、森林立派な丸太（原木）を育成するには、適切になる木々の一部を計画的に行なう作業が必要です。その作業の事を「間伐」と言い、その度に採られた木材の事を「間伐材」と言います。

間伐材の特徴として、全般的に細く、短く、様々なサイズの木材があるということです。

*間伐材の最大高さ 2000mm、幅 200×200mm

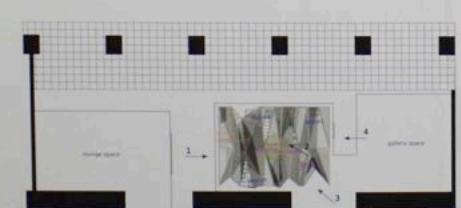
thinned wood-間伐材



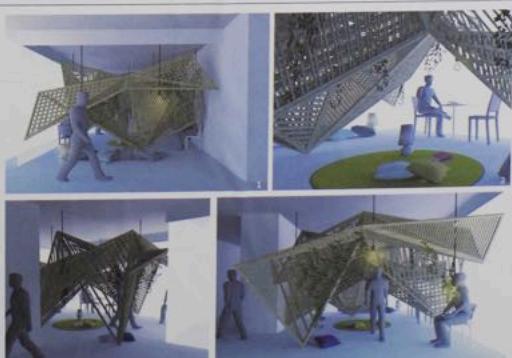
combine-組み合わせる



site



計画地は、33号館一階にあるギャラリースペースである。右手には同じくギャラリースペースがあり、左手にはラウンジスペースがある。

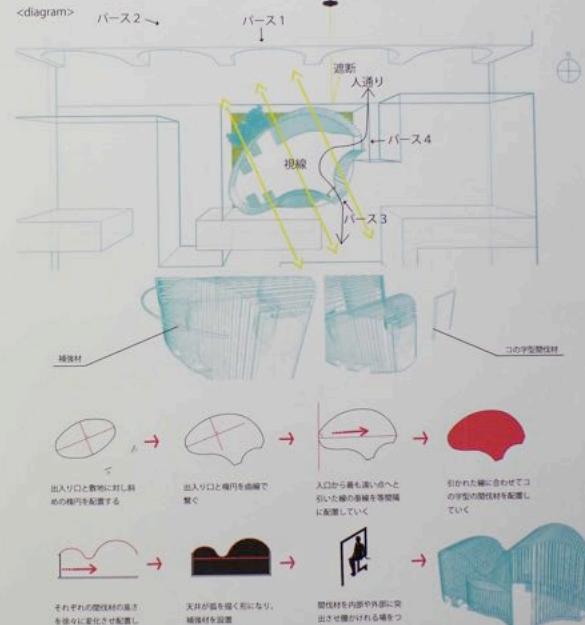


優秀賞

(5作品 1万円分の図書券)

「隙間の憩い」

13-0294 山本 裕輝



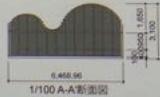
<コンセプト>

「非日常的な自然を感じ、訪れる人へ憩いの場の提供」

大学内やその周りを含め、自然を感じれる場が少ない。そのような環境に自然を感じられる場を設けることにより非日常を演出し、自然と人が集まり交流の場となり、訪れる人々に安らぎを与える。

<設計趣旨>

全身に自然を感じれるよう空間を複雑形にした。自然というものは不規則なもので構成されているのでそれを表すため平面は直線的ではなく、ゆがんだ形となっている。その平面にコの字型の間伐材を高さを変化せながら等間隔に配置していく。この間伐材がルーバーの役目となっていて、外部を感じることができる。さらに敷地の北側は人通りが多く沢山の視線が感じられるが、このルーバー代わりの間伐材でその視線がある程度遮断することもできる。間伐材は部分的に内部や外部に向かって突出している。その凹凸に腰かける。天井は大小二つの山の様な断面になっている。これは天井高を操作することにより空間を仕切るためである。真ん中の最も低い谷の部分では少し屈まなければ先へは進れない高さになっている。入口から奥へと天井高が下がっていくことにより訪れた人に期待感を与える。33号館の出入口に建てるということでその通り道を出来るだけ遅らす、なおかつこの場に立ち寄るよう内部へと誘導させるようなつくりになっている。

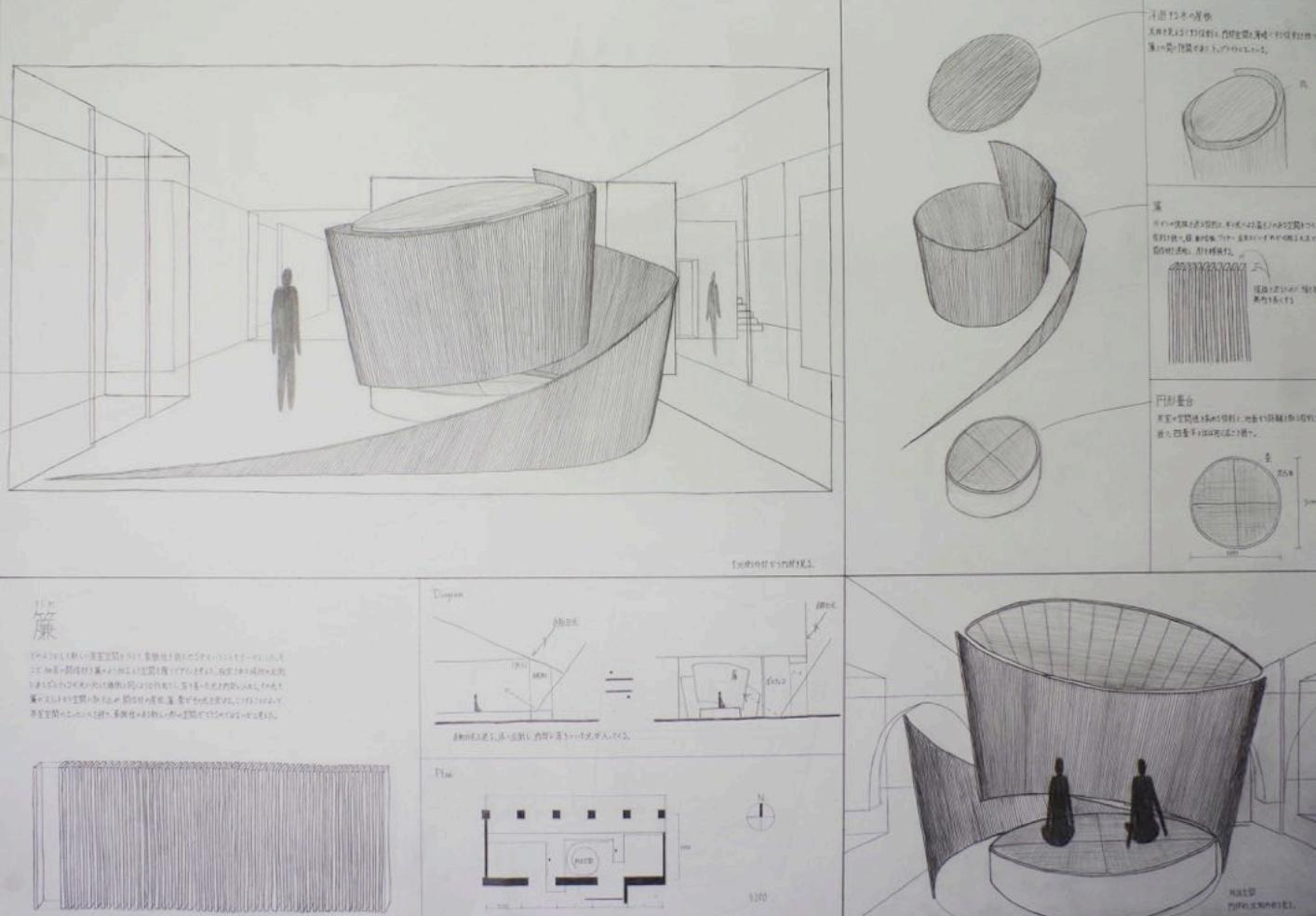


特別賞 (賛八会賞)

(2作品 1万円分の図書券)

「簾」

14-0149
向瀬 琢治

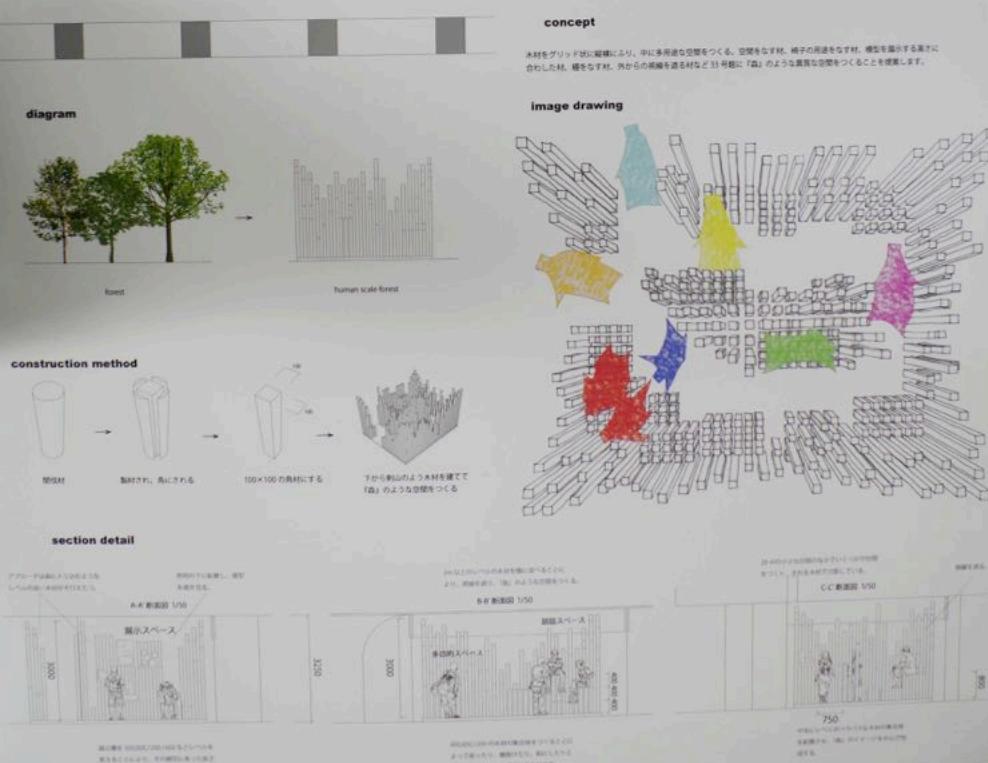


特別賞 (賛八会賞)

(2作品 1万円分の図書券)

「迷走する森」

大学院1年 島袋 竜次



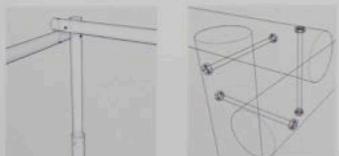
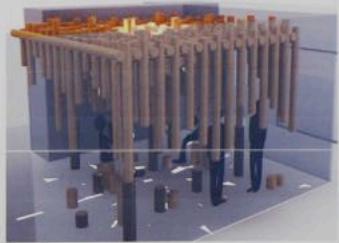
佳作

(11作品)

「糸」



都市部に「森」を想起し、天井から木が降ってくるような不思議な空間が
来客者を誘入れる。自分の気に入った場所を見つめ、そこに椅子を移動
させることによって自分だけの空間を構築できる。頭上の木に注意すること
によって頭が必然的に下がり、茶室の作法のひとつ「対等な場」を確保し、
現代的茶室の確立を図る。

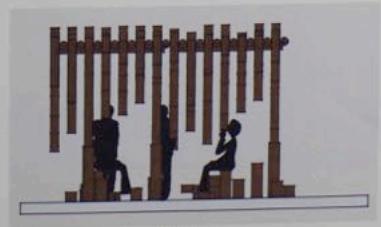


1. 坐る・立つ・展示する空間
2. 空間から頭上を見上げる
3. 屋根伏
4. 頭を下げる作法
5. 鳥瞰図
6. 3号館面からギャラリーを見る

構造部分
ボルトによって繊細に接合でき、空間構成の仕方に可変性が生まれ、自由に空間を作れる

狭い空間の中に客と専主が対話する、濃密な空間が生まれた。小間を追求する中で、より濃密な空間を生むことが可能になった。

にじり口には身分の差異なく同じように頭を下げなければ茶室に入れば、平等であるという意味がある。



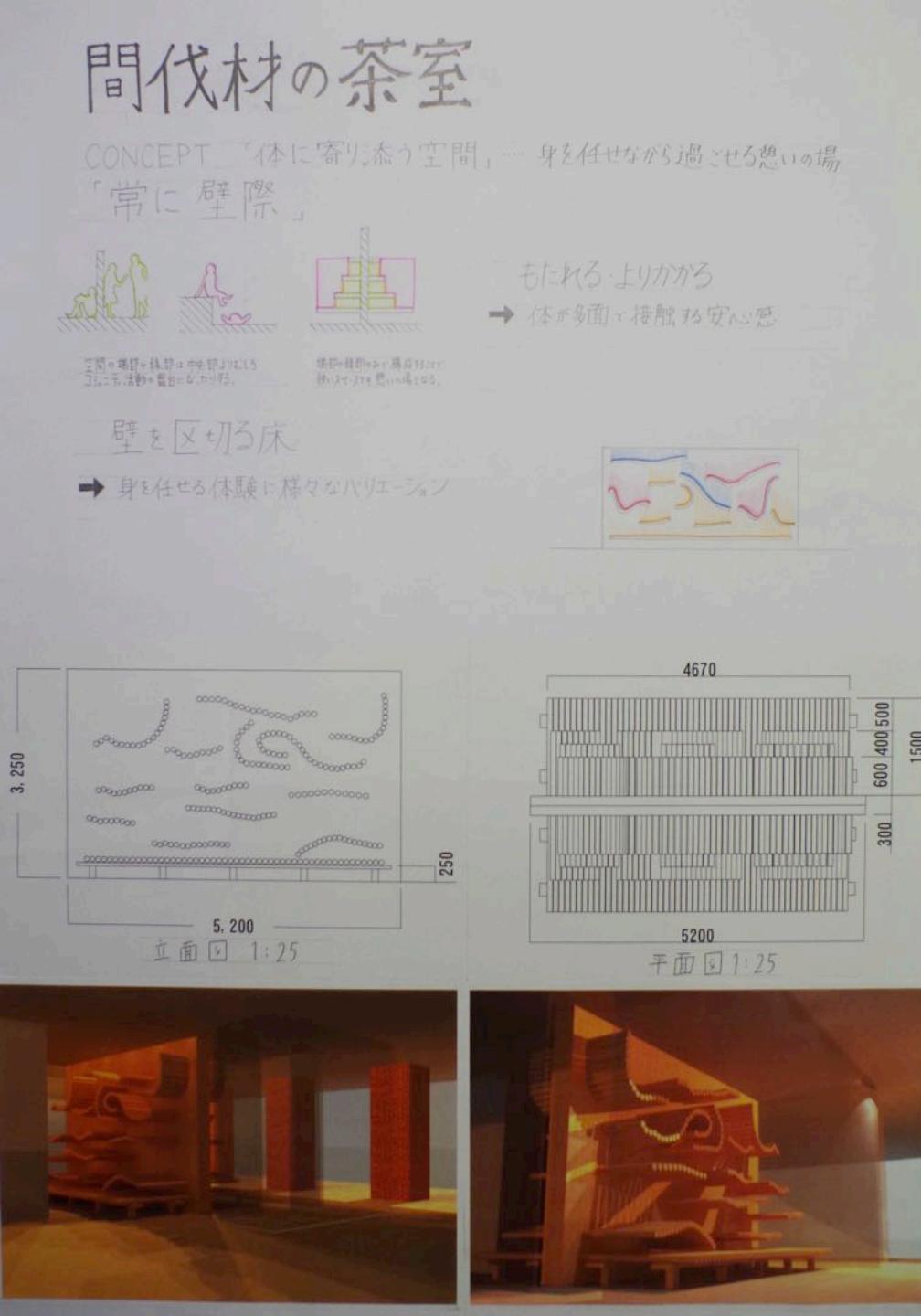
| | | |
|--------|----|-----|
| 13-266 | 大倉 | 有沙子 |
| 13-210 | 水野 | 英之 |
| 13-270 | 竹田 | 桂子 |
| 13-279 | 軽部 | 春希 |
| 13-292 | 石生 | 啓悟 |
| 13-331 | 田中 | 秀知 |
| 13-278 | 木村 | 真也 |
| 13-255 | 村瀬 | 俊輝 |
| 13-343 | 宗内 | 龍弥 |

佳作

(11作品)

「常に壁際」

- 14-226 吉永 隆乃佑
14-227 永野 匠
14-228 張 涛
14-248 永田 大樹

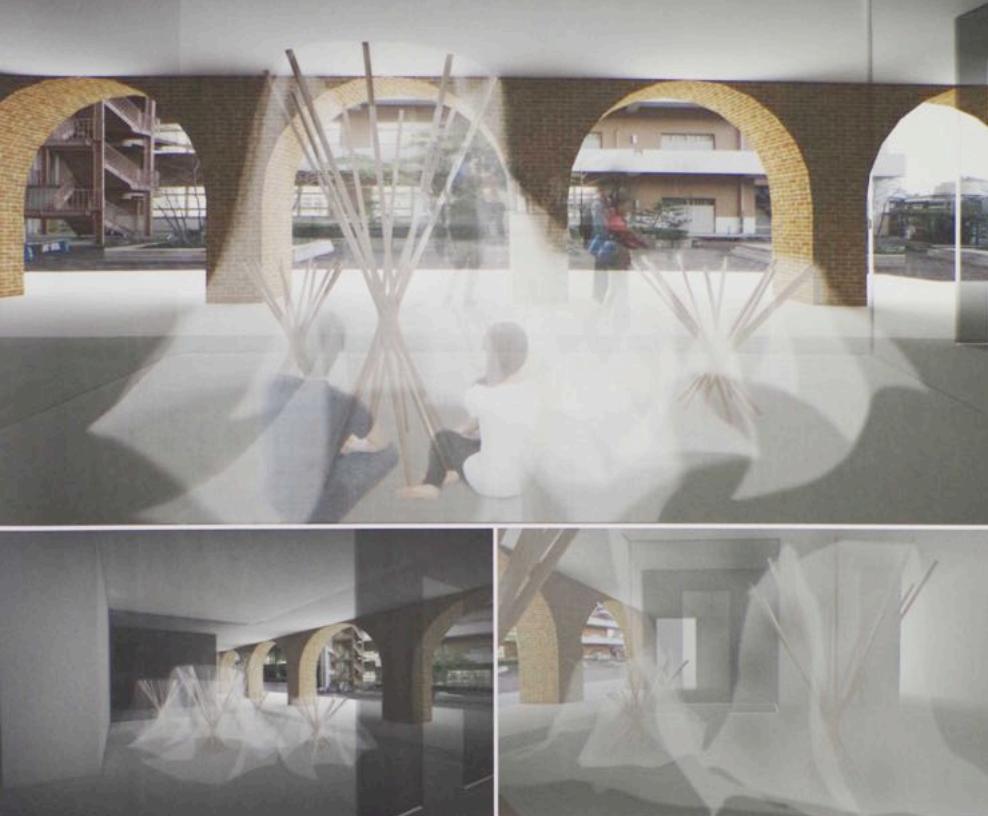


佳作

(11作品)

「CHA-SEN」

大学院1年 辻 陽平



CHA-SEN

DIAGRAM 1

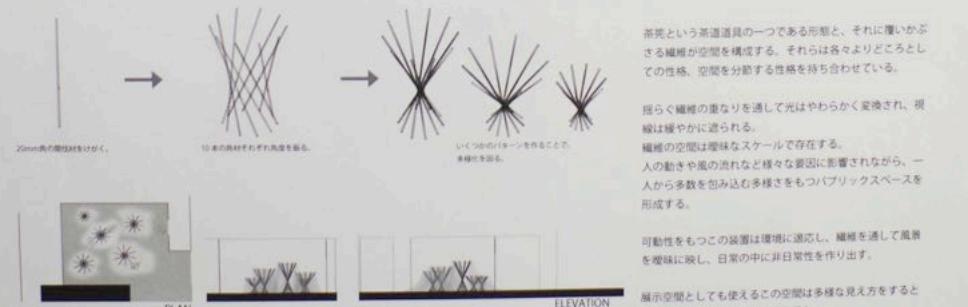


DIAGRAM 2



佳作

(11作品)



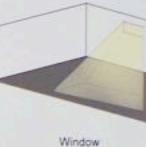
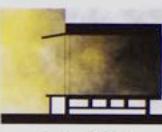
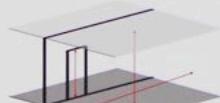
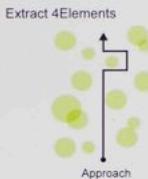
無想の境界 かすかな受容と暗闇

Concept

誰かがいる場所で私たちはその場所を楽しむ。そのためにはそれを他の空間へつなげる。そして利用する空間がどうして繋がっているか。これは既存設計の本質学習からも重要。しかし、空間から空間、空間から空間へ繋がっている感覚となる。これは、最もこの空間、最小の文字だからこそ触感のある感覚へつながる。どうしたくてこの感覚が生まれるのかも。

無想空間とは人の心を動かす、興奮させる、興奮する空間である。その他の空間の中で人とは心地良し、楽しかった空間を、最も面白だと経験、高め思考に行こうとする、心地良いものである。何を考えてもいいなあとき、スバルなどで画面のワーティングが発揮されるのが面白いと感じる。

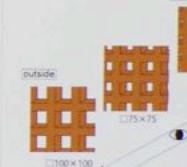
無想空間は構成する要素、つまり空間要素から、その空間を作り出す、「アプローチ、スケール、右側、窓」の4つの要素から成る。アプローチは空間へ向かう際に、心を沸かし、空間への期待感、緊張感をある。



Diagram



アプローチは空間へ向かう際に、心を沸かし、空間への期待感、緊張感をある。



アプローチの構成要素は身体的感覚を元に、空間の大きさを変化させ、感覚をもたらす。



右側の構成要素は人の心を喜ばせ、心地良さをもたらす。



窓の構成要素は外の世界を楽しむ、外を引き込む、窓の外を想像する。

Photo 01-01

Photo 01-02

Photo 01-03

Photo 01-04

Photo 01-05

Photo 01-06

Photo 01-07

Photo 01-08

Photo 01-09

Photo 01-10

Photo 01-11

「夢想の境界」

大学院1年 下村 啓太

佳作

(11作品)

「cycle of rebirth」

大学院1年 小濱 文悟

■Introduction

建築学科の授業で技術の実習で学ぶことは多い。
しかし、建築の素材そのもの、マテリアルに触れる経験が少ない。

そこで図「樹木材の変遷」では、
マテリアルとして木材建材や日用品になるまでの
プロセスを体験できる空間デザインを提案する。

■structure

構造式に積み上げた木材を縦横に固定することで構造体とする。
木材を天然乾燥させるための工程である構造みをせすとして
構造に使用することでプロセスを自然と体験させる。

■process

構積みで積み上げた木材の隙間に土を入れる。
開拓前の森の深緑い空間。

人工林で土に光が当たると植物が育たない。

構積みで積み上げた木材に開口を空け光を取り入れ。
隙間の上に植物が生えてくる。
開拓後の森、光が射し植物が生いしける。

人工林が開拓された時に光が届き植物が育つ。

開拓材を板状にして、自然乾燥させる。

日用品や家具として利用される。

■Composition

構成図

西側のエントランスに座っている人や植物対話のための場所。

日光が入ってきて植物が育つ。
開拓後の森のような場所。

最初の入り口部分。
日光あまり届かず薄暗い場所。

平面図1/20

■Perspective

構成図

開拓前の深い空間

開拓材を使ってレベルに変化を与える

開拓材のうえに植物が育つ

北側断面図1/20

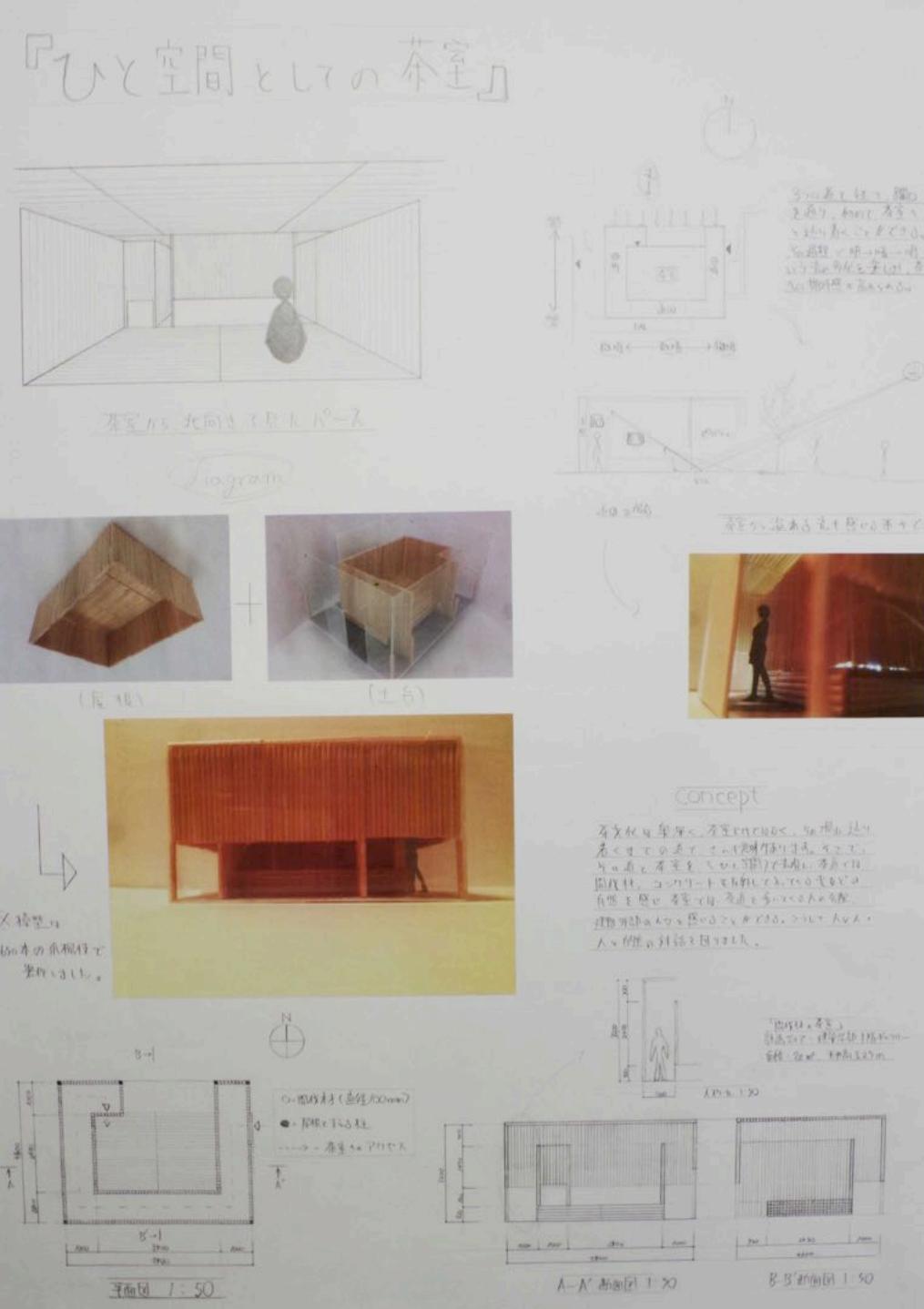
西側断面図1/20

佳作

(11作品)

「ひと空間としての茶室」

14-152 上田 純也
14-224 荒本 晃大
14-216 柴田 直希



間伐材の茶室

CONCEPT.

茶室とは、身分制度が嚴格であった時代、全ての人が身分に関係なく茶の湯の文化に触れることが叶うる空間であった。

そのため茶室の入り口は狭くなっている。入るために一度頭を下げたり、武士も刀を差したままで、入れないようになっていた。

そして何より茶室は、外の世界と別世界であるような感覚を客に与えていた。

狭い入り口は室内に入ったときに高い天井、奥行きを感じさせる複数効果がある。

今回の課題では、この空間が利用する人にとって、外部の空間とは異なる感覚になるように考えた。



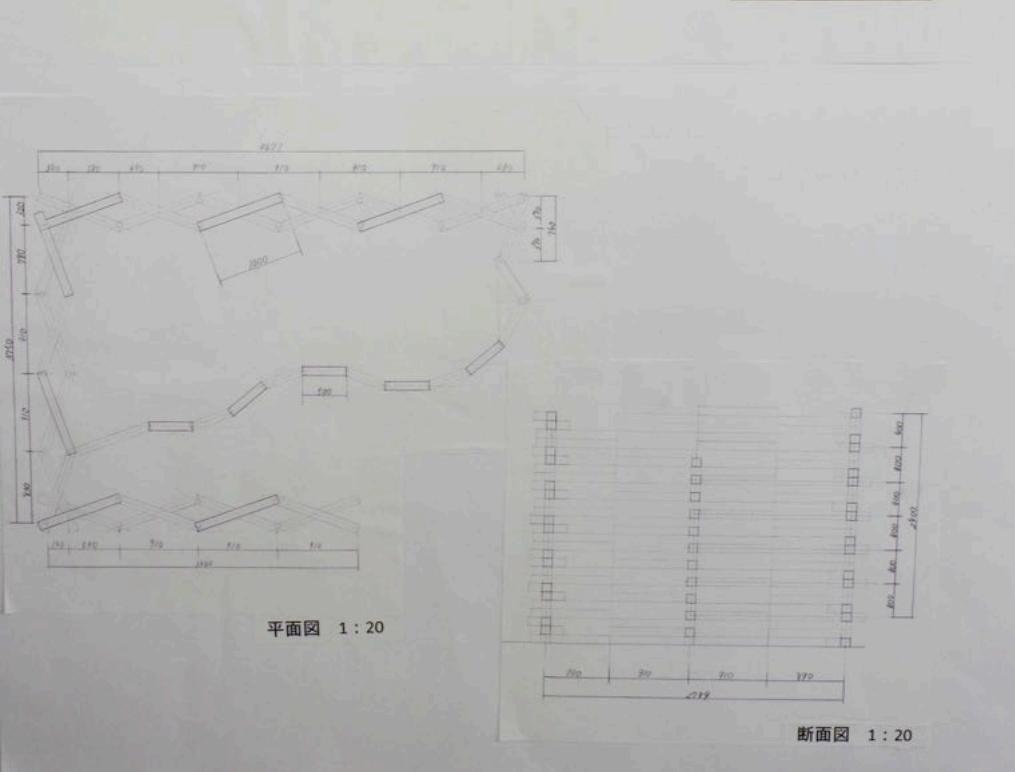
茶室への入口は高さが低くなっている。利用する人が内部に入ったことを、動作で感じさせる。



木材のブロックを重ね合わせることで、隙間があり、外部からの光を取り込むことができる。



33号館の一階はガラス張りの空間であり、自然光も入ることを考慮し、室内灯に頼ることではなく、自然光を取り入れやすいように開放的な空間つくりを考えた。



平面図 1:20

断面図 1:20

佳作

(11作品)

「間伐材の茶室」

14-257 吉内 宗太郎



concept

「作り・組み立て・知る」

皆が木の持つ特徴を学ぶ。木の持つ特徴を知らないと木の持つ特徴を解りません。そこで木の持つ特徴を学ぶことが出来ます。木の持つ特徴を学ぶことで、木の持つ特徴を解ります。木の持つ特徴を解ることで、木の持つ特徴を理解します。木の持つ特徴を理解することで、木の持つ特徴を解ります。木の持つ特徴を解ることで、木の持つ特徴を理解します。

diagram

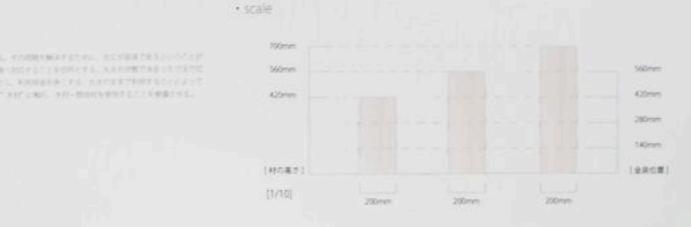


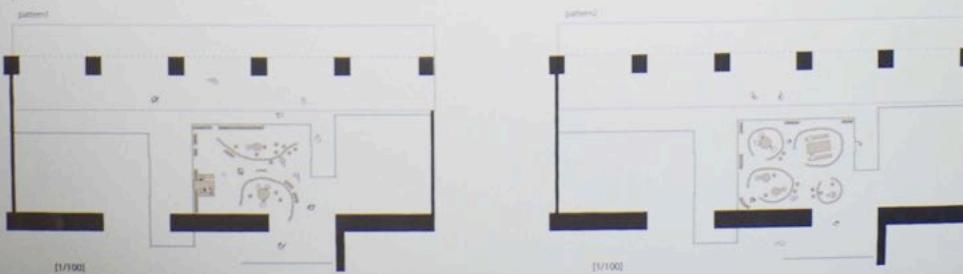
diagram1



diagram2



plan



佳作

(11作品)

「Malti Log」

大学院1年 神田 峻伸

佳作

(11作品)

茶室は、身分の違いに関係なく、一人の人間として対等な立場でのコミュニケーションを行う空間として利用され、現代まで受け継がれてきました。

私たちの生きる現代社会ではインターネットの普及などにより、コミュニケーションの手段は多様化していき、茶室のような日常と非日常を切り離したコミュニケーションの場を利用する人は限られるようになりました。

現代を生きる私たちにとってのコミュニケーションの場所とはどのようなものなのでしょうか？

introduction

idea

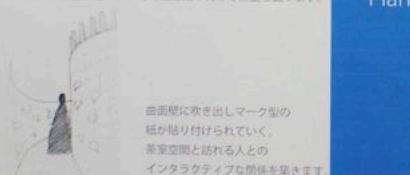
茶室空間は、会話をするお互いが同じ場所に滞在し、顔を合わせて会話をすることが前提となっています。言葉は口に出して発すると、次の瞬間には時間に流れ、消えてゆきます。つまり伝統的な茶室空間は、音声という刹那的なツールを用いたコミュニケーション空間といえます。

ここで私は、コミュニケーションの手段を音声ではなく、文字という時間的制約から解放されたコミュニケーションツールを用いる茶室を提案します。

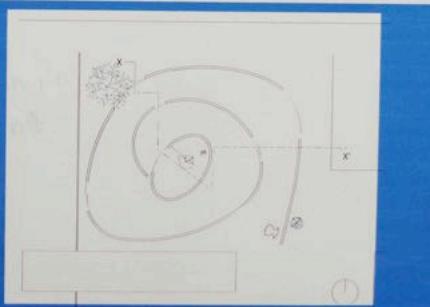
この茶室には、人と人が顔を合わせて会話する空間がありません。人ひとりが中に入り、紙に文字を書くための空間があるという質素な内部空間です。

紙に何を書くかは自由ですが、書いた本人は自分が誰なのかは明記しません。このことによって、コミュニケーションに匿名性が生じます。自分の身分、年齢性別等に関係なく、他者とのコミュニケーションを取ることが可能になり、会話をする相手が顔を合わせるこれまでの茶室とは異なる、不特定多数の人々とのコミュニケーションをとることができ、ある種のSNS性を帯びた現代における茶室というコミュニケーション空間です。

茶室に訪れた人は、中央の書く空間で紙にメッセージを書き込み、出でていく際に曲面壁のどこかにその紙を貼り付けて茶室を去ります。

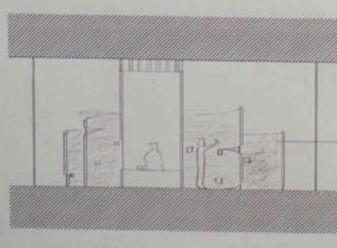


Plan



曲巻き状の動線計画は、茶室の内部へと導かれるにつれて、訪れる人の精神が統一されていく様子を表現しています。また、曲線カーブの壁面を用いることで、比較的狭い場所でも空間に伸びやかさをもたらします。茶室にいくつもの接けを設けているので、外部空間とのつながりや時間によって空間の印象の変化があります。

Section



Material

間伐材を細状に加工し編み込んだものを柱で支持したもの壁として使います。編み込む材の密度によって光が漏れだします。



drawing

原元のスリットによって現れる光と影によって光の飛び石が現れます。こういった飛び石や窓口などの茶室の伝統的な空想体験を抽出することで、茶室としてより純度の高いものになります。



佳作

(11作品)

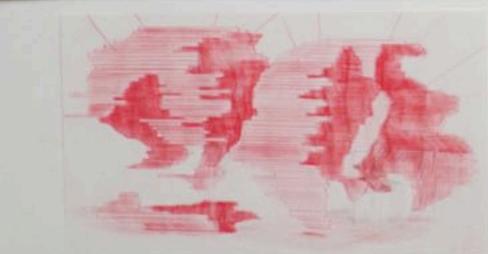
「対話する空間」

14-278 吉田 亜矢



对话する空間

小さな構成要素が集合し、大きな開けられた空間を作り出す。
さながらザイゴのよう、内部の様子を少しでも外部へ表出させ
たり、外部の環境を柔らかく内側へと伝えていく。
内部と外部を繋げた様様子を表現することで、對話していく人の対話や
自然との対話を実現する空間を作り出す。



Concept ~ 現れた芽

人と人、自然、人の対話には、現れた芽。
空間ではひとつの組織が他の組織と対話する様
子をもたらすものがある。そして、内と外
との対話を促進する空間として、内と外の
間に現れた芽をつくる。

Dialog

内と外から見掛けへ

内部に現れている芽は
外部の様子を示すもの。
これがどうか、見こころ
と対話して、開放を試み
る。それがではなく、外部
との対話が主目的だから
こそ、現れた芽のように
見えるのだろう。

Making

立派様をつくら
あたらしい開けた
うつむきの空間をつくる
内と外の対話の
空間をつくる。

内と外から内側へ

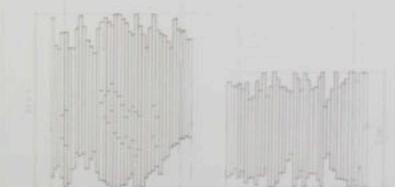
内部の様子を外部に
現さないで、何とする
内の構造を理解する
。そして、外などと内側へ
入れる。

窓つくり

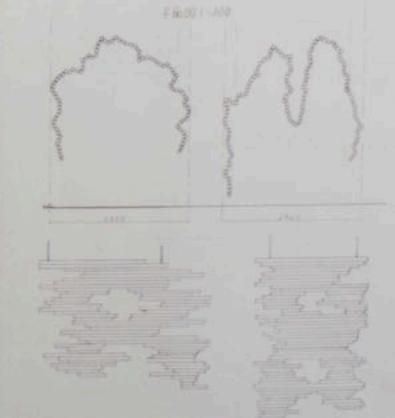
窓つくり

窓つくり

窓つくり



平面図 1-600



断面図 1-600

間伐材の茶室



~入口~

暖簾をくぐった先には、33号館の近代的な空間とは全く違う「和」の空間が待っている。外部との繋ぎを阻絶する「壁」により室内は広縫い。しかし木材の壁と調和した「和風スタンド」の灯りが仄暗い空間を温かく照らし出し、薄ち落いた雰囲気を演出する。



~床側~

入口と同様に穴をくぐると、ガラス張りの経側に出る。「長椅子」と「和風スタンド」だけの質素な空間、室内を「寂の空間」とすると、こちらは「純の空間」。

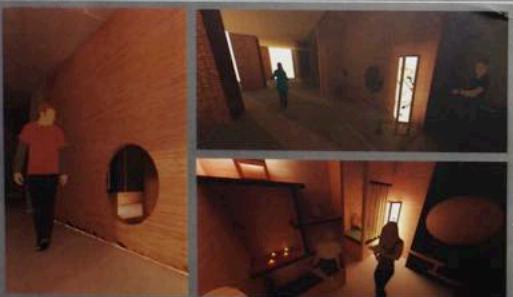
望月庵

-Concept-

茶室という和のイメージから外れず、書院造の構成を踏めた空間

書院造の構成をした「襖の間」「漆い間」「経側」「甲屋」をイメージした座席スペースと茶室の「満月口」を做了た小さな入口と内部を隠す「壁」が、普段の33号館1階とは違う外部から隔たれた別の空間を作り出す。

黒色の屏風に空いた穴を満月に例えて、望月庵と名付けた。



~屏風~

屏風を意識した腰掛。厚みのある壁は中心がぐりぬかれていて中にに入ることができる。焼き仕上げで黒色に。

~達い桶~

達い桶を意識した腰掛。達いによって座ることのできるスペースを生み出した。桶は展示スペースとしても使える。

~床の間~

豪熱きではあるが、周りより1段レベルを上げることで他の間を模倣した座席スペース。

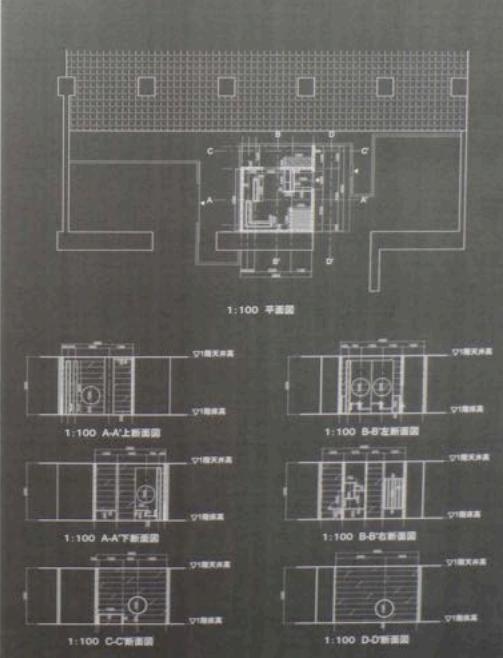
~屏風~

~達い桶~

~床の間~



書院造の茶室



佳作

(11作品)

「書院造の茶室」

14-0250 中山 雄登